

放射線科学

ウィーンの森の物語（“RADIOLOGIE”の発足）

玉木 正男

「健康文化」には Johann Strauss 作曲「ウィーンの森の物語」の Waltz の話も面白いと思うが、この小文は、X線専門の独立した診療科がウィーンの森にかこまれた病院で、他に先がけて発足した物語である。

X線の発見を報告するレントゲン先生の論文が出版されたのは今年から 100 年前、1895 年末であった。本誌第 9 号に記したように、先生は X 線写真を論文に示さなかったが、レントゲンの発表からわずか 1 カ月以内にブダペストとウィーンの物理学者の撮影した X 線写真が初めて出版物に出た。それは主にヒトの指を撮影したもので、特に骨折の X 線写真がウィーン大学から発表されたのは注目すべきである。

何故、X線の医学的利用がこのようにウィーンでもっとも早く発足したのか。ドイツ、ヴェルツブルクで発表された科学の情報、資料が、100 年前の通信、輸送、交通を考えると、他国よりも早く隣国オーストリアの首都ウィーンに伝達されたこと、また本誌第 9 号に述べたように物理学者の近縁者が編集するウィーンの日刊新聞に詳細な速報が現れたこと、またウィーン大学では、物理学者と医学者が兄弟であったなどで、物理学と医学の円滑、迅速な協力が実現したことなどがあげられよう。

やがてウィーンの医療施設内に X 線装置が設置され、その運用に専任する人々が追々出て来たのであった。

L. Freund:

X線の人体に対する影響にもっとも早く注目した医学者の一人はウィーンの Leopold Freund である。Freund は早くも 1896 年秋に X 線治療に着手したのであったが、X 線照射を受けた一幼女に起こった組織壊死を契機として X 線傷害は学界の重大関心事になって行き、これは次記の二学者に始まる X 線量計の開発・研究にもつながる。

Robert Kienböck は元来ウィーン大学病院第三内科出身であるが、1904年からウィーンの Allgemeine Poliklinik のX線部門 (Röntgen-abteilung) の指導者となり、次記の G. Holzkecht と共にX線医学者として世界的に有名であった。X線の医学での利用は、多数のさまざまな患者の診療と共に多くの難しい問題をかかえているから、とても他の診療の片手間にやれるものではなく、専門分野として専任する医師がぜひ必要という主張から、1903年 Kienböck は Holzkecht と共にウィーン大学医学部に対して「医学の独立分野としての medizinische Radiologie (医学的放射線学)」と題する建白書(「ウィーン臨床週報」1904年 p.1349に報告)を提出した。これは Jauregg 教授(進行麻痺の研究で後年ノーベル賞受賞)らの支持もあって承認され、文部省の認可を経て1904年には Kienböck、Holzkecht、上記の Freund の三人がウィーン大学から Dozent für medizinische Radiologie の学位を受けた。この Dozent は講師に相当するが、大学内の地位と言うよりはむしろ大学の授与する学位、称号である。1905-6年のX線医学専門誌 Fortschritte Röntgen. には、論文著者の所属として Radiologisches Institut der Allgemeinen Poliklinik in Wien (Leiter:Privatdozent Dr. R. Kienböck)という表現もみられるようになった。ただ、その頃はオーストリアの他の大学はもちろんドイツの大学においても放射線医学の講座は未公認で、ウィーン大学の総合病院 Allgemeines Krankenhaus で Holzkecht を指導者(Leiter)とする Radiologie の部門が大学医学部の教室 (universitäres Institut) として公認されるのは容易でなかったようである。

ウィーンで作られた Radiologie、radiology という語に関連して：

上記のように medizinische Radiologie という語は1903年に既に作られたが、形容詞なしの単なる Radiologie でも放射線医学を意味する場合が多い。語源的には radiation に関連した科学技術と解せられ、X線(医学的応用だけでなく)はもちろん radiowave(電波)の technology も含まれておかしくない。実際、一般図書館で雑誌 Radiology の閲覧を請求して radio、電気学の部をさがしてもみつからないと返事されたのは、終戦直後東京の米国 C I E 図書館での筆者の体験である。しかし、radio(電波で音声を伝達するラジオ)が一般化したのは1920年前後であるから、その十数年前に医学が radiology という語を先き取りしたと言えるかもしれない。事実、雑誌 Radiology は radio と無関係で北米放射線医学会の機関誌であり、英国の British Journal of Radiology も、ドイツの Radiologie 誌も放射線医学の専門雑誌である。

R. Kienböck:

先にも述べた Robert Kienböck は放射線医学のスタートした時期における偉大な指導者であった。放射線医学の専門化に心をくだき、また X線量計を開発したことで解るように放射線治療を推進しただけでなく、X線診断学では骨系統の研究に力を集中した。Kienböck 氏病としてドイツ系医学だけでなく英米医学でも周知の月状骨(手根骨の一つ)に起こる軟化症を *Fortschritte Röntgen* 誌上に報告したのは 1910 年であった。

その 1910 年に Kienböck は乗馬中の事故で脳底骨折をきたし、放射線医学の第一線から退いたのは大変残念なことであった。その後、生を終えるまで数十年間、専ら書齋にあって骨関節疾患の X線診断についての著述に力をつくしたのであった。

G. Holzkecht:

Guido Holzkecht は初めウィーン大学病院第一内科に勤務していたが、その時から X線装置を運用していた。1902 年からウィーンの国立総合病院 *Allgemeines Krankenhaus* の *Röntgen-zentrale* に勤務し、1905 年からその部長となった。放射線医学の技術、放射線診療全般にわたり指導的役割を果たしたことは、たとえば専門誌 *Fortschritte Röntgen* などを通覧するだけでもわかる。Holzkecht は努力と情熱の人であり、専門分野における多くの後輩に対する温情は語り伝えられている。

Holzkecht の職業上の放射線障害は、先ず手に現れ癌化したので早くも 1910 年には示指の切断手術を要し、1931 年 59 才で死去する時まで続いた。ウィーンの緑樹にかこまれた Holzkecht の記念碑(図 1)にみるように、「レントゲン学の教授、先駆する闘士、科学の殉教者」であった。

先駆者 Holzkecht の指導する放射線科のあったウィーン大学の *Allgemeines Krankenhaus* の歴史的な建物は、本誌第 10 号に述べたように今や様相を変え、森に囲まれたその建物(図 2)の中庭ではワルツ曲「ウィーンの森の物語」も聞かれることであろう。

(1995 年 1 月記)

(大阪市立大学名誉教授)



図1 Holznecht の記念碑



図2 ウィーンの Allgemeines Krankenhaus